

- 肥料、農薬、園芸・包装資材、農業機械など幅広い生産資材の調達と供給
- トータル生産コスト低減に向けた省力技術の普及など

露地栽培の農作物に欠かせないマルチ。その多くがポリエチレンを原料とするポリマルチで、世界的な廃プラスチック問題の高まりから、廃棄コストが高騰するなど課題となっています。そこで、JA全農耕種資材部

は、土壌で分解される生分解性マルチの普及に注力。生産者の省力化と環境調和型農業の実現を目指しています。同部園芸資材課に、生分解性マルチのメリットや普及方法についてお聞きしました。

# 生分解性マルチで環境調和型農業を実現



## 省力化、環境負荷軽減へ 対象作物拡大し普及

### Q ポリマルチと 生分解性マルチの違いは？

もともと日本国内で多く使用されてきたマルチの素材はポリエチレンです。使用後ははぎ取って、自治体等が指定する日に指定の場所まで持ち込んで処分する必要がありますが、手間や保管の場所、処分費用が生産者にとって負担となっていました。

一方、生分解性マルチは、土中の微生物と加水分解によって、水と二酸化炭素に分解される特殊素材でできています。伸びなどの物性や水分保持力は少し劣るものの、雑草防除や地温保持はポリマルチと遜色なく、マルチャー（機械展張）も可能です。使用後はそのまま畑にすき込むことができますため、はぎ取りや処分など生産者の廃棄にかかる作業負担が減り、省力化できるのが特長です。

### Q 普及の背景は？

使用済みのポリマルチはこれまで、資源ごみとして中国などに輸出してきましたが、世界的な廃プラスチック問題の高まりから、近年輸出が難しくなりました。それに伴って国内での廃プラの処理料金も高騰しており、生産者にとって処分費用が



収穫後に生分解性マルチを畑にすき込む様子

大きな負担となっているのが現状です。そこで、省力化できるだけでなく、処分の手間や費用がかららず、廃プラ削減や環境負荷軽減にもつながる生分解性マルチの役割が高まっています。

現在のマルチに占める割合は約10%で、主に省力化を進める法人経営や大規模生産者に普及が進んでいますが、課題はポリマルチに比べて3〜5倍程度高い価格ですが、一度使用した生産者にはそれ以上のメリットを実感いただけており、多くの方に使い続けていただいています。「省力化することができた」「次の作付けのスケジュールを立てやすくなった」などの声をいただけており、出荷本数も年々増加しています。

### Q 普及方法や今後の展望は？

JA全農は環境負荷を低減し、環境調和型農業を実現するため、引き続き生分解性マルチの普及に力を入れてまいります。多くの生産者に生分解性マルチのメリットを体感してもらうため、2020〜21年にかけて、全国300の生産者に提供し試験的に使用してもらいました。その結果、これまで主に使用されてきたトウモロコシやエダマメ、レタスだけでなく、カボチャやラッカセイなどさまざまな品目に対象作物を広げ、事例を蓄積することができました。

今後、内容を精査した上で事例集として全国に配布し、さらに普及を進めていく計画です。24年度には、現状の年間7万本（21年度）から10万本まで取扱本数を増やし、生産者の省力化と環境負荷低減の両方に貢献していきたいと考えています。



JA全農  
耕種資材部  
園芸資材課

大野 弘登さん

2013年に岡山県本部に入会し、2019年から本所・耕種資材部で勤務。主に農業用ビニールやPO、マルチなどの被覆資材を担当。